目　次

1章　大学での勉強とレポート・論文の書き方
―はじめてレポートを書く人のために― …… 1
1.1.　本書の目的と特徴　2
1.1.1　本書の目的　2
1.1.2　本書の特徴　2
1.2.　大学の教育とレポート・論文の書き方　5
1.2.1　大学でのレポート・論文とは　5
1.2.2「学－問」と創造的能力の育成　5
1.2.3　講義中の態度・質問　7
1.2.4　レポート・論文とは「学－問」である　7
1.3.　レポート・論文の有用性　9
1.4.　本書の構成　10

2章　テキスト批評という練習法 …… 13
2.1.　テキスト批評とは何か？　14
2.2.　なぜ本（テキスト）を読むのか？　15
2.3.　テキスト批評の仕方　17
2.3.1　テキストについて　17
2.3.2　全体の構成　17
2.3.3　各構成部分の作り方　19
2.4.　テキスト批評の効果　30

3章　論文の要件と構成 …… 31
3.1.　論文とは何か？　32
3.2.　レポートとは何か？　34
3.3.　レポートを書く際の注意　36
3.4.　論文の構成部分とその順序　40
3.5.　各部分で何を書くか？　43
3.5.1「目次」　43
3.5.2「序論」　44
3.5.3「本論」　47
3.5.4「結論」　50
3.5.5「付録」　52
3.5.6「文献表」　52
3.5.7「索引」　53
3.5.8「謝辞」、「まえがき」、「あとがき」　53
3.6.　その他の構成方法　55

4章　テーマ・問題の設定、本文の組み立て方 …… 57
4.1.　テーマ・問題の設定　58
4.2.　本文の組み立て方　64

5章　注、引用、文献表のつけ方 …… 71
5.1.　注のつけ方　72
5.1.1「注」とは何か？　72
5.1.2　注の目的　72
5.1.3　注の種類　73
5.2.　注記号（番号）と注欄のつけ方　74
5.2.1　注記号（番号）のつけ方　74
5.2.2　注欄のつけ方　74
5.2.3　注のつけ方の注意　74
5.3.　引用の仕方　76
5.3.1　著作権と引用　76
5.3.2　引用の仕方　77
5.3.3　引用の際の注意　77
5.4.　注欄における引用出典の書き方　80
5.4.1　日本語での一般的な出典表記法　80
5.4.2　引用出典の実例　81
5.4.3　同一出典の略記　83
5.4.4　欧文語の文献を引用した時の出典表記法　84
5.4.5　引用出典の実例　86
5.4.6　簡易な組込注のつけ方　87
5.5.　文献表の作り方　90
5.5.1　作成上注意すべき点　90
5.5.2　日本語での細目表記順序　91
5.5.3　欧文文献の表記の仕方　91
5.6.　欧文略号・略記一覧　95

付録1　「見本レポート」　98
付録2　接続語・接続表現による文の論理的結合　105
付録3　インターネットの利用法　107
参考文献　114
あとがき　119

1章

大学での勉強とレポート・論文の書き方

—はじめてレポートを書く人のために—

1. 1.　本書の目的と特徴

1. 1. 1
本書の目的

この本は、大学ではじめてレポートを書こうと思っている人や、卒業論文に取り掛かろうとしている人のために、そもそも大学でのレポートや論文とは何か、どう書くのか、を初歩から説明したものです。

とくに、大学の１・２年生の総合的教育の講義でレポートを課された人や、通信教育のレポートを書こうと思っている人には、ぜひ知っておいてほしい基礎的な事柄が述べられています。

1. 1. 2
本書の特徴

⑴　本書では、レポートや論文を書くときに踏まえなければならない基本的な**要件と形式**をもっとも重視しています。

皆さんは、大学に提出したご自分のレポートや論文が、「感想文の域を出ていない」と評価されたことはないでしょうか。あるいは、何をもってレポートや論文と言うのかご存じでしょうか。日本の学生、とくにいわゆる文系の１・２年の学生は、感想文・エッセイと呼ばれるものと、学術的な文章であるレポート論文の区別がついていない場合がまだ多いのです。

本書は、この区別をはっきりと示しながら、簡単なレポートから卒業論文レヴェルまでを念頭に置き、レポートや論文の構成の仕方をハウ・ツー的にまとめてみました。本書で言う論文とは、おもに実験や観測、統計的調査などを伴わない人文・社会科学系の分野のものを想定していますが、そのほかの分野においても基本は変わることはありません。

⑵　第二に本書の特徴として、「**テキスト批評**」という、これまであまり紹介されていなかった**レポート・論文の非常に有**

効な準備方法について詳しく説明してあります。

新入生がいきなり独創性のあるレポートを書くことなど、日本の教育法では、ほとんど不可能です。そればかりか、卒業論文を書かなくてはならない段になっても、多くの学生が入学時からあまり進歩していないのが実情です。とくに、学生にとっての悩みの種は、テーマ設定とテーマに関する問題設定です。卒業論文では、自分自身でテーマを設定しなければなりませんが、テーマは、突然思いつくものではないからです。

そこで、本書が推薦する有効な練習方法が**テキスト批評**です。「テキスト批評」とは、ある論文なり著作なりを読んで要約し、そこから自分なりの問題を提起して、その議論を展開させる文章です。批評（コメンタリー）を書くことは、その本の主張を鵜呑みにするのでなく、検討し考えながら読む練習になります。それと同時に、自分独自のテーマ（主題）で論文を書くための、非常によい準備にもなります。重要な著作を読みながら、自分のテーマや問題を形成していく過程を学ぶことができるからです。

また、本書で養ってほしいのは、**議論（argument）するのに必要な表現力**です。「議論」とは、意見が不一致ないし対立している場合にそれを一致させたり、表明された意見の真偽を明らかにしようとするコミュニケーションのことです。レポート・論文は、議論から成り立っています。テキスト批評は、この、議論する能力を向上させます。

⑶　第三に、本書は、「**レポート・論文の書き方**」**という授業のテキストに使える**ように考慮しました。アカデミックな表現力の向上を目的とした授業を行っている大学は近年かなり増

えてきていますが、まだ本当にその教育方法が確立しているは言えません。しかし表現力やコミュニケーション能力を養うことは、今の社会でますます重要になっています。

「レポート・論文の書き方」という授業があるならば、本書の順序どおり、まずテキスト批評から始めて、そのなかで生まれたテーマと問題について、レポートなり論文なりを書くという手順が学生にとってやりやすく、また、その後の論文作成のためにも効果的と思われます。

⑷　第四の本書の特徴は、**注や参考文献表の作成方法についての具体例を多くのせて、実用的である**ことを心がけた点にあります。実際にレポート・論文を書いている時に手元において、いつでも使えるように工夫しました。後述するように、大学でのレポート・論文だからといって、引用や参考文献の出典をおろそかにはできません。

注や参考文献表の作成は最初は煩瑣に感じますが、規則さえ覚えればそれほど苦ではなくなります。その点、マニュアルや辞書のように本書を利用していただければよいと思います。

1. 2.　大学の教育とレポート・論文の書き方

1. 2. 1 大学でのレポート・論文とは

これまでの高校までの試験では、記憶をためす穴埋め式や短い記述式が出題の多くを占めていました。しかし今後の大学受験では論理的な論述力が重視されるようになります。大学に入れば、レポートを提出する機会は格段に増えますし、分量もずっと長いものを書かねばなりません。また、最終学年では、多くの学生が卒業論文を書くことを求められます。

といっても、最初は大多数の学生が、「レポートや論文は、感想文とはどう違うのだろうか」とか、「論文はどのように構成したらよいのか」、「どのようにテーマを決めたらよいのだろうか」、「どうしたら論理的な文章が書けるのだろうか」といったごく初歩的な疑問を持っています。それもそのはずで、高校までではこうした文章を書く技術をほとんど教えられていませんし、大学でもきちんと授業で学ぶ機会がなく、自己流で習得していることも多いのです。では、どうしたら満足のゆくレポートや論文を要領よく書けるようになるでしょうか。

その実際を説明する前に、レポート・論文を書くことは、大学教育においてどのような意味合いを持つのか述べておきましょう。まず、大学での**学問**と高校までの**学習**との違いに注意しておく必要があります。レポートや論文とは、学習ではなく、学問にかかわる文章のことだからです。

1. 2. 2 「学ー問」と創造的能力の育成

大学は学問をするところです。「学問」と聞くと何かとても堅苦しい印象がありますが、言葉を分解すると分かりやすくなります。それは、「学」んで「問」うことです。

高校までの勉強では、社会に出るために必要な教養や常識、

実用的知識を学びます。それらは基礎ですから、徹底的に記憶する必要もあるでしょうし、くり返し問題を解くように練習する必要もあるでしょう。こうした勉強は、既存の知識や問題解決法を吸収し獲得することに重きを置いた**学習**であると言えます。

大学にはさまざまな専門分野があり、そこでも専門的知識の習得を行います。しかし、いずれの分野においても、ただ受け身に知識を「学習」するだけでは、大学教育としては不十分です。と言うのも、完全な知識なるものは存在しませんし、すべての理論はいまだ仮説である以上、従来の知識や理論をつねに自分で更新してゆく必要があるからです。つまり、大学では、現在要求されている専門知識の習得を目指す一方で、これまでの知識や理論、常識をいったん疑い、それが本当に正しいかどうか確かめる**批判的検討能力**や、なにが真の問題なのかを発見し、新たな解決法や対処法を見つけだしていく**問題発見－解決能力**の養成が求められます。

このことを人間をコンピュータにたとえて説明するならば、知識の習得は、コンピュータに情報を入力し記憶させることに当たりますが、一方、**批判的検討能力**や**問題発見－解決能力**のほうは、そもそも情報を読み取り処理しているプログラムそのものを、自分で書き換える能力に当たります。プログラムが旧来のままでは、問題解決はおろか、新しいデータを読むことすらできない、ということになるでしょう。こうした創造的な能力は、新たな産業を生み出し、社会を刷新し、組織変革をしてゆかねばならない今日の社会では、より重視されます。

このような高度の創造性は、自分でさまざまなことに問いを発してゆくことで徐々に養われていきます。これが、大学での

勉強が、単に「学」ぶだけではなく、「問」う態度が求められる理由なのです。

1. 2. 3 講義中の態度・質問

講義において、積極的に質問することが奨励されるのも上と同じ理由からです。しばしば、講義の進行を妨害するのではないか、他のみんなは分かっているのではないかと思って、講義中に手をあげて質問することを躊躇する人がいます。しかし遠慮は無用です。講義は、**全員**に向かってなされているのではなく、**各員**に向けられているのだ、と考えるべきです。一人が疑問に思ったことは、たいてい他の人も疑問に思っているものですし、教える側でも自分の説明の盲点に気づかないでいることもあります。質問はこの盲点に気づかせてくれます。

また、「それについて自分はこう考えるのだが、どうか」といった意見を表明するのも大変結構です。異なった意見や反論を出すことによって講義内容はさらに深く理解されますし、講義をより生き生きとした探求の過程にしてくれます。「学－問」するには人間と直接に対話することが大切です。対話こそが思考を刺激し、思考こそが単なる会話を深い対話へともたらします。大学で、ただ講義時に出席しているだけで先生や学生との交流がないなら、非常に多くのものを失っているのです。

1. 2. 4 レポート・論文とは「学－問」である

以上に述べてきたように、問題を見つけて解決していこうとする「学－問」的態度こそが、レポート・論文のような学術的文章と感想文やエッセイを区別するものです。つまり、**問題が提起してあり、その解答が与えられていることが、レポート・論文たり得るもっとも基本的な要件であり形式なのです**。端的には、**レポート・論文は、問い－答えという問答形式でできて**

いなければなりません。

問答とは一種の対話です。したがって、たとえ一人で問題提起をして、自分一人で書いたとしても、レポート・論文は、根本的には対話によって形成されていきます。講義やゼミナールでの先生や他の学生との対話、あるいは、本や論文との「対話」が、レポート・論文を書くうえで、とくにテーマや問題を設定するうえで、重要なきっかけや材料を与えてくれるでしょう。

考えてみれば、学問の始まりは、そもそも問答だったと言えます。現在の学問体系は、遠く紀元前４－５世紀の古代ギリシャに求められますが、その時代の代表的な哲学者ソクラテスやプラトンは、問答形式で議論を進めていました。また、東洋的学問の起源にある哲学的な仏典にせよ、儒教の書にせよ、対話形式で進行していくことはご存じのとおりです。学問とは、根本的に**問答**ないし**対話**によって成立していると言えます。

以上のように、レポート・論文の書き方と、大学での学問のあり方は不即不離の関係にあります。本書で論文の形式や構成を重視するのも、表面的な型にこだわっているからではなく、形式にはそれだけの意味があるからなのです。本書で述べるのは、具体的にはレポート・論文という文章表現の仕方ですが、それを通して、大学での研究の仕方を身につけていただければ幸いです。

1. 3.　レポート・論文の有用性

本書では、大学におけるレポート・論文の書き方を説明しますが、これは、大学のみならず実社会においても役に立つスキルです。

一般企業であれ、公的機関であれ、他の組織であれ、ビジネス文書と呼ばれるものを書く機会がたくさんあります。そのなかにはごく簡単で形式的なものも多いでしょうが、一方、レポート、企画提案書、事業計画書、結果報告書など、それなりの分量でもって自分の考えや意見を打ち出し、読む人を十分説得しなくてはならないものもあります。その場合には、感情に訴える文章や美的・文学的な表現力よりも、論理的で実証的な表現力の方が、その文書の説得力を決定します。

つまり、ビジネス文書は、大学でのレポートや論文と同じタイプの文書なのです。私たちの社会では、グローバル化がさらに加速し、多様な人びとに対する**説明責任**[*1]が重視されるようになりました。現代では、ますますさまざまな人と交渉し、自分の考えや立場を説明し、相手を説得してゆく高度のコミュニケーション能力が求められます。明確で論理的な表現力を養っておくことは、実生活上でも有用なことなのです。

---

*1　なぜこのことをしたのか、なぜこれをするのか、自分のとった行動の理由や根拠を外部に向かって説明し、正当化する責任のこと。「とにかく、任せておけ」といった白紙委任的な態度とちょうど逆の態度と言えます。

1. 4.　本書の構成

これまでの話で、レポートや論文を書くことが、大学教育で、さらには実社会で、どのような意味を持つのかお分かりになっていただけたものと思います。そこで以下、本書の構成を簡単に説明しておきます。

まず、先に述べた「テキスト批評」のやり方を次の２章で説明します。**テキスト批評**は日本ではあまりなじみのない勉強方法ですが、大学の２・３年次にはゼミナールなどで類似のことを行う機会があると思います。批評（コメンタリー）は、講義や演習で使うテキストをいかにして読むか、またそこから、どのようにして論文のテーマや問題を見つけてくるか、といった力を養うにはとてもよい方法です。また、文章を書くこと自体が苦手な人も、著者の意見を要約する過程で、その力がついてくることが期待されます。

３章では、レポートや論文の形式や要件について、４章では、テーマと問題の設定の仕方、本論の組み立て方について述べます。冒頭で述べたように、本書では、論文を書くときに踏まえなければならない基本的な**要件と形式**をもっとも重視しています。形式といっても、なにも煩瑣なものではなく、大まかな議論展開のルールに過ぎません。今までの議論を理解していただければ納得できると思います。

５章では、注や参考文献表などの標準的な作成方法について、具体例をあげながら説明します。この部分は、読み通す必要はかならずしもありません。使いやすいように工夫しましたので、実際にレポート・論文を書くときに、むしろマニュアル的、辞書的に用いていただければよいと思います。これは、すでにレ

ポート・論文を書いているが、どうも注のつけ方がよく分からない、という人にも薦められます。

付録1には、レポートとは最終的に出来あがるとどういう形になるのか、全体の構成を見わたせるように、完成レポートの具体例をのせてみました。

また付録2に、「接続語・接続表現による文の論理的結合」を表示しておきました。接続語・接続表現は、文と文を論理的につなぐ役割を果たします。論理的な文章とは、一言でいえば、接続詞による分析がよくできている文章です。

付録3では、「インターネットの利用法」を説明しています。ネット上の情報については、不適切な利用や、誤った引用の仕方が目につきます。付録3の引用表記法を参考にしてください。

最後に、より詳しく論文作成法を知りたい人や、あるいは、より高度な論文を準備している人のために参考文献をあげておきました。本書はあくまでこれからレポートや論文をはじめて書こうとする人たちに向けた入門書なので、先に進みたい人は、それらを併せて参考にするとよいでしょう。

2章

テキスト批評という練習法

2. 1.　テキスト批評とは何か？

前章で触れたように、テキスト批評は、テキストを批判的に検討する能力を養うと同時に、テーマが自由なレポートや論文を書くためのよい準備や練習となります。大学受験などで文章を読んでから書かせる小論文も、あまりに簡略化されてはいますが、テキスト批評の一種と言えます。

テキスト批評は、文学作品の注釈として始まりました。私たちは、小説などを読んで面白いと思うことがありますが、「批評（コメンタリー）」は、そこから一歩突っ込んで、「どこが、なにが、面白かったのか」、「どうして面白いと思ったのか」、「これまでの本に比べてどこに特徴があるのか」など分析的に解説して、その著作の魅力や豊かさを最大限に引き出そうとする努力のことでした。

こうして文学注釈に始まったテキスト批評は、現在では、著者の主張を批判的に検討する読解・解釈の仕方として、文学専攻にとどまらず、人文・社会科学のさまざまな分野で採用されています。そうしたテキストの批判的読解を通して、自分なりのテーマと問題を提起して議論する仕方を学ぶことになります。

2. 2.　なぜ本（テキスト）を読むのか？

大学では、とくに人文・社会科学系の分野では、過去の重要な著作をテキスト（教科書）として講読することが不可欠です。講義では沢山の著作が講読指定されますし、ゼミナールでは、いくつもの本を会読し、それについて発表を求められます。

しかし、なぜ、こんなに本を読まなくてはならないのでしょうか。「文学専攻ならともかく、自然科学や社会科学の分野では本より事実を見ることのほうが大切なのではないか。知識や理論は、事実から直接作り出せばよいではないか」。こう思われるかもしれません。

しかし、事実そのものは、知識や理論とは独立に存在している、と考えるのは少々素朴です。再びコンピュータの例を使うなら、プログラムが入っていないコンピュータは、そもそもデータを読み込むことができませんし、プログラムが異なれば、読める情報も異なってきます。事実（＝データ）は、それを受けつけるための知識や理論（＝プログラム）を前提としているのです。

事実そのものを客観的に眺めているように思われる自然科学の観測ですら、「このような観測を行えば、これこれの現象が見えるはずだ」という知識に基づいていますし、そもそも観察装置や実験道具は、そうした知識や仮説に基づいて設計制作されています。同じ顕微鏡写真を見ても、「何かの模様のようなものが写っている」という事実を見るのと、「恐ろしいウィルスの繁殖」という事実を見るのとでは大違いです。

このように、事実は、知識や理論が与えてくれる**現実の捉え方やものの見方**に相関しています。過去の重要な著作を講読す

ることの意味もここにあります。古典と呼ばれるものは、単に古き良き教養をつけるために読むのではなく、そこに表れている著者の**現実の捉え方**、**ものの見方**を学ぶためにあるのです。それは、いわば、事実を捉えるためのプログラムを自分に与えることなのです。「理論」と呼ばれるものは、この現実の捉え方を抽象化・体系化したものに他なりません。

このように著者の現実の捉え方をいったん理解したうえで、そのやり方（プログラム）で、本当にうまく事態が理解できるのか（情報を整理できるか)、問題が解決できるのか（期待されたアウトプットができるか)、見落としてしまうものはないのか（読み込めない情報はないか)、別の問題にはどのように対処するのか（汎用性があるか)、など**著者の主張をさまざまな問題や事例に適用しながら検討していくことこそが、問題意識やテーマ設定能力を養うことにつながります**。テキスト批評ではこれを行います。先に述べましたように、論文を書くに当たって一番大変なのがテーマの設定、問題の発見です。**テキスト批評は、知識の習得と、自分独自のテーマ・問題の発見を橋渡す練習なのです**。

2. 3. テキスト批評の仕方

では、実際に大学で行われるゼミナールの場面を想定して、批評の作り方を説明します。実際、この形で発表を求められることも多いと思います。

2. 3. 1 テキストについて

まず、教師がテキストを指定します。指定されるテキストの分量は一概には言えませんが、はじめてテキスト批評をする学生の場合には、数ページから多くて十数ページといったところが適当かと思います。数人のゼミナールなどで、ひとつの著作を講読するなら、一人が担当するのは一章、長い場合は一節が適量でしょう。大学院レヴェルでは、本一冊というのも可能ですが、ここでは、あくまで学部学生用の想定をしてみましょう。

テキストの選択は専門が何かによりますが、分野によっては、定評あるオピニオン誌の論文や新聞のしっかりした社説などもよいと思われます。純粋に表現力を養成するクラスでは、時事的な問題を扱った論文を使えば議論が活発なものになります。

また、あまりに実証性の強いものや報告書的な文書をテキストに選ぶと、疑問や反論などの議論を構成しにくくなります。著者がある程度一般的な主張を行っているもので、とくに政策論題（何かを実行せよとの提案）か価値論題（何々の方がよいという主張）についてのものが議論しやすいと言えます。

2. 3. 2 全体の構成

全体の構成を紙に書いたところを想定して、まとめてみると次のようになります。

書くべき分量はケース・バイ・ケースですが、数ページのテキストの批評の場合には、Ａ４のレポート用紙に２-３枚程度、

（page） 1

表　　題

名前・所属・学年など

⑴　目的の提示（５-10行ほど）

・どんなテーマのテキストについての批評（コメンタリー）なのか、当該部分で著者がどんな議論をしているのかごく大まかに説明する。

・以下に述べる手順についてごく簡単に紹介する。

⑵　要　　約（全体の30-40％ほど）

・テキストの順を追って要約（ただしメリハリをつける）。

・テキスト中の重要な用語、歴史的人物、事件などについては説明を与え、テキスト理解に役立つと思われる解説を入れる。

⑶　問題の提起（全体の10-20％ほど）

・著者の主張のうち中心的・重要と思われる点を１-２点ピック・アップする。

・これについて問題提起を行う。

⑷　議　　論（全体の30-40％ほど）

・⑶で提起した問題について議論を展開する。

・自分の主張を論理的・実証的に裏づける。

⑸　ま　と　め（全体の10-20％ほど）

・全体を要約し、結論づける。